大阪市立大学

大学教育だより

RDHE 2019.3 No.16
Center for Research and Development of Higher Education

ロゴデザイン：吉谷ひかり

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
（全学共通教育棟5階）
http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/ から読めます

大学教育だより No.16

Voice～学生の声 ● 商学部と工学部の学生交流と意見交換会
Campus Inquiry ● ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！ 経済学部・経済学研究科／法学部・法学研究科／理学部・理学研究科
OCU Education News ● 市大教育ニュース！ 副専攻制度／OCUラーニングセンター（学修支援推進室）の紹介
Center Now & Human ● 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン ロゾ（Un roseau）No.20：縦書き部分

● 井狩 幸男 先生（英語教育開発センター） ● 永村 一雄 先生（生活科学研究科）

Voice ～学生の声

商学部と工学部の学生交流と意見交換会

―― 地域経営と建築を専門とする学生の学びあい ――

工学部建築学科学生の建築作品発表会（教員・外部建築家向け）

本多先生脚本の演劇（エデュテイメント）

商学部本多ゼミ生の中間報告会（地元企業経営者向け）

商学部には地域経営、工学部には建築について学ぶカリキュラムがあります。これらは研究のアプローチや手法に違いがあるものの、まちづくりやコミュニティーといった問題を扱う点では共通しています。今回の企画では、商学部公共経営学科本多哲夫先生の3回生ゼミ生9名と工学部建築学科2回生13名が、相互の演習（商学部は地元企業経営者向けのゼミ発表会、建築学科は建築模型の教員や外部建築家向け発表会）や本多先生の脚本による地域経営をテーマにした演劇を見学したうえで、お互いの共通点や相違点について話しあいました。懇談会は2018年11月28日に本多先生と倉方先生の司会のもと、大学教育研究センターの飯吉弘子先生と商学部の石井、工学部の金も参加して開催されました。

Voice ～学生の声

商学部・工学部の学生交流と意見交換会

■ 工学部の学び ― ①工学部建築設計課題発表会を見学した商学部学生からの感想・意見

【商：A】感想としてですが、作品の発表会ということで、何か一人一人独創的な作品が多くて、とても考えさせられることがありました。空間というものを意識したことってほとんどなかったので、結構面白い授業だなと思いました。

【商：B】発表するときに、発想と、それをどう具体的につくるかという実践と２つあって、「そこの発想はいいけれど実践の面でここが」とかいろんな指摘があったように思いました。商学部では、最後に提案するときにどのようにそれが実際働くかは考えるものの、実際にどう動くかを見ることまでは提案はできない。建築学科の場合は、発想だけじゃなくて、その後の実際の形まで考えるという視点が商学部以上に強いなと感じました。

【商：C】私たちが普通に街を歩いてるときには、建物の利便性しか今まで考えてこなかったので、「設計する上でコンセプトと建てる建物が一致していないといけない」という先生の意見が多かったので、重要な部分が多いんだなと感心しました。

■ 工学部の学び ― ②工学部学生からの自らの学びに関する意見・反応

【工：A】この前、自分の高校がある街に行ったんですが、高校時代に当たり前に通っていた道路が全然違うように見えるんですね。例えば、瓦ぶきのめっちゃきれいな建物が建っていて、「うおっ」と思って興奮しながらその周りをずっと回ってみたりとか。他の家は玄関が道に面しているのに１つだけ玄関が道に面していない家があって、その家の周りの状況を見て「何で面せずに建てたんやろな」とか考えたりするのがもう面白くてしようがないんですね。

多分、この大学で学んだからというよりも、個人的に見たり、建築家が講演会をしてくださる機会もあるのでいろんな人の話を聞いたり、どちらかといえば建築はグループでというよりも個人的に働きかけて、その中で刺激をし合う学問なのかなというのは思います。

【工：B】建築は、言ってしまえばそこら中に建っているんで、それが面白さでもあって。例えば、市大のすぐそばに建っている建物は、瓦の色が多いんですよ。緑だったり赤だったり、それだけで僕らは面白かったりして。逆に、そういうところに視点を持てる人が、多分細かいところまで見てちゃんと設計できたり、他の建築に理解が深まったりするのだと思います。

もちろん、こういうところが面白いというのは、まずはやっぱり先生だったり建築家だったり誰かの話を聞いて、ああそうなんだなと理解をして、自分でもう一回見に行って、それを持ってまた話を聞きに行くとまた違って見えたり聞こえたりして、というところが建築の面白さかなと。そうやって見たり分析したりしていくのは、商学部の先行事例の研究に近いのかなと僕は感じました。

【工：C】確かに、もともと建物自体は好きだったんですが、これまでは、街を歩いている時は神社とかお寺とか遊園地とか、本当に世界観をつくり込まれたようなものしか見ていませんでした。最近、住宅とかその辺にある普通の建築物の面白さに気づいたという感じですね。

あと、建築学科は最終的にプレゼンするのは確かに１人ですが、考えている間に友達といっぱい話して、自分の考えを言ったり相手の考えを聞いたりしてやっています。なので、最後の勝負が１人なだけで、途中までは１人のようなグループのような微妙な感じなんで、そこは商学部の方ともあまり違わないかなと思います。

■ 商学部の学び ― ①商学部ゼミ発表会をVIDEO見学した工学部学生の感想・意見

【工：D】商学部の中間発表の課題と、自分たちが見てもらった設計演習の建築模型による発表課題とを比較して思ったのは、最初は何らかの問題とか命題とか課題とかを与えられて、そこから考えていくという点は同じだなということです。違いは、考える際に、自分たちは模型とか物から形を作っていって、「ああこんな感じかな」とその中である程度は学びがある。でも、商学部は、制度というか社会の目に見えないようなものを扱っているんで、それを理論で裏づけて考えていくのは「難しそうやな、大変そうやな」と感じました。

【工：E】僕は商学部といったら商いやから、すごい金もうけのイメージがあって（笑）。それがプレゼンで何か社会問題とか扱ってて、「うわっ」と思いました。すごく考えていて、すごく論理的な感じで、とてもびっくりしました（笑）。

■ 商学部の学び ― ②商学部学生からの自らの学びに関する意見・反応

【商：D】最初に社会問題の現状を見て、そこから展開していく上で、事例についてインタビューや訪問やメールで聞いたりしていると、最初の問題提起からだんだんずれていってしまって、考察を書いているうちにその対比がうまくできなくなっていたりということが発生してしまいます。

解決策として、最初の問題提起から自分で仮説を作った時に、その問題と今から論証していく仮説とを対比させて、対比表現を用いることで言語的に流れを整えようとしています。でも、ずっと同じ論文を執筆している仲間内だと、気づかない内に少しずつ少しずつずれていって、最終的に大きなずれになってしまっていました。今回の中間発表のように、外部の経営者の方からの質問とかを受けないと、そうしたずれを自分たちだけで見つけるのはかなり難しいと感じています。

【商：E】あと、お金もうけのイメージの話ですが、僕たち３チームは、今回お金もうけの話をあまりしていなかったですが、やっぱりいずれはどこかの形でお金もうけにつながっていく話しだとは思います。例えば、僕たちＡ班の地域コミュニティーの話に関しても、地域経済を活発化するということは、お金もうけにもつながるんですね。

■ 学びの違いと共通点 ― 商学と建築学の学びにおける感覚性と論理性

【工：A】僕たちも、先生たちから論理的に突っ込まれる時は結構突っ込まれるんですが、でもそうじゃないときもあって。この前の公開発表会のときも、「うわ、いいね」と言って建築家の先生たちが作品をがばっと囲むんですよ。でも、当の本人は論理的に全く考えてなくて、「この長さで組んでるのがいいんだよね」と、割と感覚的に作ってたりする。論理的と感覚的の両面を持っている学問だと思うので、一概に論理性がないと言うのもちょっと違うのかなとは思うんです。

【飯吉先生】「これはどうしてこのように作ったのか、コンセプトは何か」など、言語化して説明することを問われている場面が結構ありましたね。感覚的でもあり、でも論理的にある程度説明しなきゃいけないという感じですね。

【倉方先生】前後が逆みたいなところがあって、論理があって最後に物やシステムができてくるのか、物があってから後で内包されている論理がだんだん紐解かれていくのか、その点は結構差があるんですよ。

【商：F】私たち商学部は文系で、工学部は理系ですが、イメージでは、理系がきっちりしていて文系がふわふわしてるって思っていました。私たちは、文系ですが論理的であろうとしているから、そこを褒められたのがうれしかったですけど、工学部は感覚的っていうのもすごく意外でした。

【工：F】建築を論理的に考えているのは、多分より西洋人的な考え方で、アジアの人は体とか心で建築をつくるイメージが私の中にあります。例えば、アメリカとかヨーロッパの建築では、どうしてその構造になっていて、どうしてここにはその柱が必要かなどその柱には柱の役目や意味があります。でも、東洋とかアジアだと、適当ということでもなく、こちらに何を置いたら住み心地が良いなど感覚的・直感的に良い、ということがあると思います。

■ 将来のキャリア展望

【商：A】行政のほうから社会を良くしていきたいなと思っていて、将来のキャリアとして公務員を考えています。例えば建築に携わっている人が、行政や政府とか公的な機関に求めるものは何なのかを知りたいです。

【工：G】僕も公務員志望です。徳島出身で、徳島県で県庁の採用を見たときに建築系の公務員採用があったんで興味があります。徳島では、駅前の商店街がシャッター街になっているとか、地域活性化させなあかんという問題もあって、行政も動いているので、そういうことに関わりたいと思って志望しています。

【商：D】この夏に住宅企業のインターンに参加しました。住宅分譲の際の街のコンセプトとして、今私が研究テーマとしている地域のつながりが密着になるような分譲配置をグループで考える課題がありました。都市系や建築系の学生さんが多かったですが、私みたいに商学部とか社会学部の人もいて、文理入り混じってグループワークをしました。ふだんやっていることは全然違うけど、図面描くのはやっぱり建築専門の方が上手だったり、プレゼンは私たち文系が得意だったり、役割分担をしながらやったのが結構面白かったです。インターンでは、自分のやっていることが理系と混ざったときに、こういう化学反応を起こせるんやなとか、実践的な学びができて面白かったです。

【倉方先生】ほんと、社会の縮図ですね。

【本多先生】そういう授業を大学でやらないといけないですね、本来ね。

【飯吉先生】全学共通教育科目は様々な学部の人がいるので、授業の中で学年や学部学科が異なるグループで1つの課題を考えてもらうと、それぞれ新たな学びがあるようですね。

■ 本日の意見交換会の感想

【工：H】インターンシップの話を聞いていて楽しそうやなと思って、今回文系と理系で交流できたのもすごく良い機会やったなと思ったんで、こういう機会が普段の授業でもあったら、大学でもっと楽しい授業ができるかなと思いました。

【工：E】建築学科と商学部は全然違うと思っていたのですが、何かを生み出すときの、アイデアがあってそれを具体化していくプロセスは似ているなと分かって、思ったより面白かったです。

【工：F】建築学科でも商学部でも、人と関わりのある学問の中で、答えのないことを勉強しているので、みんなで答えを探して、他の人と一緒にもっと良いことができればいいなと思います。

【商：G】商学部も建築学科も社会を良くしていこうというのは同じだけど、そのプロセスや視点がちょっとずつ違っているということを学べたのが、今日のすごく大きい学びやったなと思いました。

【商：B】目的が同じでも全然違うアプローチがあるというのは、学問として共同してやるともっと新しいものが生まれると思うし、それぞれを生かし合ってできるような社会になればもっと良くなるんじゃないかなと思いました。

【商：A】文系と理系それぞれの価値観や考え方を大切に、それを交流することで考え方を共有していくことが、今後につながるのではないかなと感じました。ありがとうございました。

［参加教員の感想］

地域・社会の問題に対する捉え方・アプローチに関して学問間の共通点と相違点を実感できる貴重な機会となりました。　（石井）

このような理系と文系の学生交流がもっと盛んに行われ、将来の文理融合型の教育・研究の発展につながることを願っています。　（金）

文責：大学教育研究センター兼任研究員　経営学研究科　石井　真一
兼任研究員　工学研究科　金　大貴

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/ から読めます

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

経済学部・経済学研究科

Collaborative Online International Learning (COIL) を用いた海外の大学との共同授業

みなさんは、20年後どのような仕事をしているでしょうか？AIやインターネットの発達で大きく社会が変化する中で、働き方も大きく変わると考えられています。グローバル教育は、どのような職業に就く人にとって必要な教育だと思いますか？世界中を駆け巡り、様々な国の人達と交渉するような人でしょうか？

1つ目の質問への私の答えは、どのような職業に就いたとしても、みなさんに求められるのは「問題を発見し、解決する仕事」です。どのような問題も、それを取り囲む環境や状況と切り離しては存在しません。関係する人がいて、そのコミュニティーの歴史があり、それが問題化した経緯があります。それを総称してコンテキストと呼びましょう。みなさんが解決しなければならない問題は、既存のコンテキスト上では解決できない問題です。なぜなら、既存のコンテキスト上で解決できるような（簡単な）問題であれば、既に解決されている筈だからです。問題を発見するとは、生じている問題をコンテキストと共に理解し、正確に解決すべき事を発見する能力を言います。そして、問題解決能力とは、全てのステークホルダーが受け入れ可能なコンテキストを創造し、実現することによって解決できる能力を言います。

2つ目の質問への私の答えは「大学生全員」です。問題発見、解決能力を身につけるために最適なのは、コンテキストを共有していない外国の学生と共に問題解決をする経験だからです。大学におけるグローバル教育は、むしろ、大学卒業後に外国の人と仕事をする機会が皆無の学生にこそ必要です。海外に行くと視野が広がると言います。コンテキストが異なるとはどのような事なのか、ある状況を見たときに、より広い視野で問題を捉えるためにどうすれば良いのか。その答えがCOIL（インターネットを使って行う共同授業）です。日常的な授業の中で、じっくりと海外の学生を意識しながら調査研究するような授業を行うには、海外の学生とグループワークをするのが良いと考えました。

経済学部では2015年からフィリピンのデラサール大学とCOILを開始しました。現在、経済学部では1・2年生向けの少人数教育「イノベーティブ・ワークショップ（IW）」で4クラス、3年生向けの「専門演習3（ゼミ）」で1クラス、専門科目の「計算機経済学」でCOILを行なっています。昨年度からアメリカのアンドリュース大学も加わり3点接続をしています。

例えば、IWでは、三大学の学生が「所得」、「雇用」、「教育」、「健康」、「人口」のいずれかのテーマを選びグループを作ります。グループ毎に、それぞれの国が抱える問題を紹介し、SNSを使って意見交換をします。中間報告と最終報告の際には、三大学をテレビ会議システムで繋いで発表会をします。発表会の質疑応答ではチャットも併用するなど工夫しています。授業アンケートでは「最初は不安だったけれど、思ったよりも通じた」という意見や、「英語をしっかりと勉強しようと思った」という意見が多くみられます。

今年度から「大学の世界展開力強化事業」の助成を受け、全学で展開することになりました。近い将来、経済学部に限らず、どの学部の学生でもCOILの授業が受けられるようになりますので、楽しみにして下さい。

経済学研究科教授
中島　義裕

学部研究科 教育・FD 紹介

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

法学部・法学研究科

少人数教育における近時の試み

法学部では、「主体的に問題を発見する能力と、自己の見解を社会に発信する能力」、また「法学的政治学的知識を主体的に展開する能力、特に自己の主張を論理的に構成し表現・文章化する能力」の育成を目標にして、日々の研究教育に取り組んでいます。法学部の教育の中心は講義と演習ですが、先の目標にある「主体的に問題を発見する能力」や「知識を主体的に展開する能力」がもっともよく養われるのは少人数での議論といえますので、以下では、法学部における演習授業について、近時の試みを踏まえながら紹介します。

1. 基礎演習

少人数による議論の場として１回生前期に提供されるのが「基礎演習」です。基礎演習では、25名程度からなるクラスを１人の教員が担当します。担当教員の専門分野は様々ですが、法学部生にとって必要となる法学および政治学の基礎を身につける共通部分と、各教員がその専門や個性を生かして選んだ素材について学生が自由に議論する部分とからなります。

2. 専門演習

「専門演習」は3回生および4回生に向けて開講されます。専門演習では、原則として15名以下の定員のクラスを一人の教員が担当します。履修する学生の多くは3回生であり、同じ関心のもとに集まった学生が、時には教員との間で、時には学生同士で、1年を通じて議論することになります。

専門演習において報告と議論を重ねるなかで、特定のテーマについてさらに深く検討してみたいと感じる学生もいます。そのような学生のために、2017年度から、「演習論文」の科目が設けられました。これは専門演習と同時に履修されるものです。学生は、専門演習の教員とのより綿密な議論を基礎としながら、自らの研究成果を論文形式で執筆することで、高度の調査分析能力や表現能力を養います。執筆された論文は、教員全員の閲覧が可能な状態におかれますので、学生も教員も気が抜けません。

3. 法政２年次演習

法学部における少人数教育は、ながらく、「基礎演習」と「専門演習」との２本の柱で支えられていました。基礎演習において法学・政治学の基礎的な知識とそれに迫る方法を得たのち、各専門の講義によってさらに知識を深め、3回生からの専門演習において知識を展開し問題を発見する能力に磨きをかけると考えられていたからです。しかし、基礎演習の終了から専門演習の開始までの約20か月の間、学生に対しては、外国語演習などを除けば、少人数による議論の場を提供していないことになります。そこで、講義科目の理解を深め、専門演習に向けての準備を段階的に進めていくことができるように、2016年度から、「法政2年次演習」を設けることになりました。

4. 法学カフェ（仮）

以上に紹介した演習は、基本的には、「1人の教員」対「複数人の学生」という形式であり、その限りでは講義と同じであるといえます。しかし、「主体的に問題を発見する能力」や「知識を主体的に展開する能力」を養う方法は、なにも1人の教員が複数の学生の相手をする形式に限られるわけではありません。そこで、正規の教育課程からは外れますが、少人数による議論の場を確保する試みの一つとして2018年度に行われた「法学カフェ（仮）」を紹介します。

これは、お茶とお菓子を片手に、進路のことや勉強のことなどを複数の教員と気軽に話す場です。ここでは、専門の異なる複数の教員と、学年や関心の異なる複数の学生とが、同じテーブルを囲みます。学生の前で教員が互いに議論するからでしょうか、それとも、お茶とお菓子とを片手にしているからでしょうか、いずれにしても、会話は不思議と弾みます。その会話の先に、正規の演習とは違った形で、問題を発見することになります。

研究も教育も様々な観点から制約が多くかつ強くなる昨今ですが、教師と学生との目指すべき関係は、このような自由な雰囲気の中から生まれてくるような気がします。

大学教育研究センター兼任研究員　法学研究科教授
杉本　好央

学部研究科 教育・FD 紹介

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

理学部・理学研究科

理学部における「地球学野外実習」での学び

日本の各地でおこる地震活動や、ここ最近活発になってきた火山活動など、私達のまさに足元を脅かす変動現象が立て続けに起きています。しかし、これらの現象が、日本列島の下に太平洋プレートやフィリピン海プレートが沈み込んでいることに起因している、などということを大学の講義やテレビ等で聞いたとしても、その事実を実感することまでは困難です。理学部地球学科では、地球の営みを学生に体感してもらえるように、実際に野外に出て、地層や岩石、鉱物、化石に触れたり、地形などを観察する体験をとても重要なものだと考え、様々な野外実習科目を提供しています。

そのような実習科目のひとつに、学部1・2回生を対象とした「地球学野外実習A・B（以下、実習）」という科目があります。毎年9月下旬にかけて3泊4日程度で行われ、2018年は熊本県の阿蘇山周辺、2017年は兵庫県の山陰地域など、毎年交代する担当教員の趣味に応じて、様々な場所が実習地として選ばれています。実習では、大阪近郊では観察できない地層や岩石等を観察することで、より大きなスケールで、日本列島の成り立ちや変動の様子を理解できるだけでなく、学科の仲間や先輩、先生たちと寝食をともにすることで、学部生活の中でも特別な思い出ができます。

ところで、この実習は現地に行って観察するだけでは終わりません。一般的に、現地調査をするうえで重要なことは、なぜその場所に行くのかを事前に理解しておくことです。この実習では、実習地についての地質学的背景や関連する専門用語の解説をまとめた1冊のパンフレットを、前期講義期間を通じて学生自らが作成するという課題が課されます。学生はこの課題を通じて、これから自分たちが調査する場所について予習するだけでなく、専門的な報告書の書式や

図1　これまで作成された実習パンフレットの数々

文体、ワープロソフトの使い方などの基礎も学びます。この作業は一班あたり1・2回生がそれぞれ3～4人ずつの合計8人程度の班で、内容を分担して進めます。まだ経験の浅い1回生は2回生の先輩にリードされる形で、一方、2回生は1回生に教えることでより理解を深めながら作業します。大学院生のティーチングアシスタントが折に触れて作業の進行具合を確認し、適宜指導もします。最終的に、班ごとに作成した内容を一冊のパンフレットにすると100ページ程度の分量になります。このパンフレットはきちんと製本され（図1）、実習本番前に一人一冊配布されます。

実習本番では、それぞれの班で調査する場所を現地で選択し、調査を行います。実際の地質調査では、地形の観察、地層を構成する岩石種の判別、地層の傾斜の測定等様々な作業を，普通は1～2人で何日もかけて行い、調査地域の地質構造などを推定します。実習では、それを疑似体験することを目的として、班のメンバーで手分けしながら、ごく限られた範囲の調査を1～2日かけて行います。1回生は入学してから半年間学んできたとはいえ、いざ野外に出ると何をしていいかはほとんどわかりません。しかし、そこを先輩である2回生がぐいぐいと引っ張っていくことで、班として課題をまとめていきます（図2）。

図2　実習の様子（和歌山県潮岬）

調査をしたその日の夜にまず、調査の途中経過をまとめ、現地の宿泊施設で班ごとの発表会が開かれます。調査で記録した地図、フィールドノート、写真などをスライドにまとめてパソコンで発表します。一日歩き回った後のまとめの作業はなかなかにきついですが、限られた時間の中で皆結構頑張ります。実習が終わって帰宅した後は、フィールドノートを各自でまとめて提出することと、班ごとの最終発表会があります。手分けして行った調査をまとめて地質図を作成し、自分たちなりにその地域の地質構造を提案します。最終発表会では、必ずメンバー全員が分担して発表しなければなりません。この発表会には、実習を引率した教員以外の教員や3回生以上の先輩も参加し、質疑応答が行われます。

このような一連の作業（企画、調査、報告）を通じて専門的な知識や技術を深めるだけでなく、情報を整理することやそれを人に伝えることの難しさ、他の班の発表を聞くことで、自分たちが見落としていたことや、同じ場所を調査しても様々な解釈があることなどを体験します。最終発表会の最後には、学生・教員から自然と労いの拍手が起こります。

大学教育センター兼任研究員　理学研究科准教授
柵山　徹也

学部研究科 教育・FD 紹介

市大教育ニュース!

大阪市立大学　副専攻制度

大阪市立大学は、2015（平成27）年度より、主専攻（それぞれの学部・学科で修める単位）に加えて、さらに広く、深く、自発的な学修をすすめたいと考える学部生を対象に、ふたつの副専攻を設立しています。①学習余力と意欲と能力があり、②主専攻と副専攻を両立でき、③各副専攻が求める要件を満たす、の３つを備えた人であれば、学部を問わず履修することができます。

詳しくは、入学手続き書類に同封されている「副専攻ガイド」をご覧ください。

GC（Global Communication）副専攻

- ●目的　：不確実な社会で生き抜くことのできる語学運用能力とグローバルマインドを涵養する
- ●キー演習　：GC総合演習1・2・3※1年次後期～2年次開講
- ●キー海外研修：GC_Int（GC副専攻専用カナダ・ビクトリア大学語学研修）
  ※2年次前期、9月実施予定
  ※成績優秀者・語学運用能力上位者には研修費支援制度あり

2019（平成31）年度の正式登録者募集は7月です。2019（平成31）年度入学の1回生のみGC副専攻に登録できます。希望者多数の場合は、各種語学力テストのスコアに基づいて選抜が行われます。

登録希望者向けガイダンス日程については、全学ポータルサイトおよびチラシにてご案内します。関心のある方は、入学後から語学（特に英語）のスキルをバランスよく伸ばし、副専攻の登録・履修に備えましょう。

CR（Community Regeneration）副専攻

- ●目的　：大阪を拠点として、変化し続ける地域・社会の問題を解決するとともに、その発展に貢献できる人材を養成する
- ●キー演習１：地域実践演習（GATSUN）※1・2年次向け
- ●キー演習２：アゴラセミナーIa／Ib／II ※2年次以降向け

2019（平成31）年度の地域実践演習履修希望者向けの説明会が開催される予定です。CR副専攻への登録には地域実践演習の受講が必須要件ですので、希望者は説明会に必ず参加してください。説明会の日程については、全学ポータルサイトにて事前にご案内します。

関心のある方は、全学共通科目の中から大阪・地域にかかわる科目を積極的に学び、副専攻の登録・履修に備えましょう。

OCUラーニングセンター（学修支援推進室）自学自習の空間では学生の皆さんの自主的・能動的な学修を専門のスタッフがサポートをしています。

OCUラーニングセンター

ホームページ

https://www.tlc.osaka-cu.ac.jp/

学修相談

誰に質問したらいいの？

- ●レポートってどう書くの？
- ●グループワークってどうするの？
- ●自主的に学べって言われるけど、どうすればいいの？

相談受付時間：平日10時～17時15分

教育と学修支援のためのセミナー企画

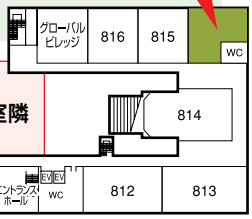
- ●レポートのいろは
- ●市大生の井戸端会議～期末試験対策編
- ●討論のいろは
- ●数学何でも相談会 etc.

学生による学生のためのイベント！

OCUラーニングセンターに来れば、「学びのTips」が多数用意されています！

- ●大学での数学の勉強について
- ●大学で学ぶってどういうこと
- ●先生への質問や相談の仕方
- ●レポートの書き方
- ●数学理解度チェックシート…

8号館1階（自習室）OCUラーニングセンター



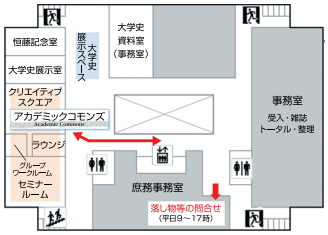
OCUラーニングセンター（学修支援推進室）
【場　所】全学共通教育棟1階 815教室隣
【開室時間】平日 9:00~18:00
【連絡先】06-6605-2906

数学相談

試験前には行列ができるほど人気!?

- ●1年生の必修科目を中心になんでも！
- ●基礎力をしっかり身につけたい…
- ●今日の授業でわからないとこがあったな～…

（担当：数学研究所博士研究員）



Ma-NAVI場

通称「学情」6階のアカデミックコモンズ内のブースでもOCUラーニングセンターは、週一回学修相談を受け付けております。

英語相談

自分のペースで実力を上げたい…でもどうやって？

- ●自分で書いた英語のライティングの課題を基に、個人指導で弱点克服したい…
- ●自分の実力を知り自分の目的に合わせた英語の学習方法を知りたい…

Center Now & Human

大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます!

FD（Faculty Development）活動

（1）FD研究会（年1回）

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2018（平成30）年度、第16回の全体テーマは「本学の学修成果保証スキーム・教学IRの現状と課題① ― 教員・学生調査・教育実践評価から考える」でした。

（2）教育改革シンポジウム（年1～2回）

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれています。2018（平成30）年度は、第26回全体テーマ:「新しい入試を超えてくる学生とは? ― 学生・生徒の“ 学び ”の高大接続を考える」講演題目:「高校生の主体的学びとその見える化を促進するJapan e-Portfolio」（講師:関西学院大学アドミッションオフィサー 尾木 義久様）でした。

（3）FDワークショップ・大学教育研究セミナー（年数回）

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等をとり、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

（1）大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1～2回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

（2）大学教育だより & Un roseau（アン ロゾ）ほか

本学の学生・教員および学外の方々に、総合大学である大阪市立大学における様々な教育の取り組みと、学生の学びの様子や可能性を知っていただくための教育広報誌『大学教育だより』と、本学での学びの道しるべとしての全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を、2006年度から合冊発行し広く学内外に配布しています。また、『新入生のための学びのスタートガイド』も発行しています。

センターが関わっている研究活動

（1）学修の評価に関する研究

本学で学ぶ学生・院生の学修成果の状況を把握し、教育のさらなる充実や改善につなげていくために、学士課程・大学院課程の在学生と卒業生・修了生に対するアンケート調査やインタビュー調査などを実施しています。調査結果は、報告書にまとめたりFD企画で発表したりして学内での共有にも努めています。また、成績評価結果をもとに学生一人ひとりが何を身につけてきているのかを自身のキャリアデザインも踏まえて把握できる仕組みであるOCU指標の開発にも協力しています。

（2）教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

①学修支援推進関連:学生の能動的学修を促進するための支援を行う学修支援推進室（通称:OCUラーニングセンター）において、自主学修補助教材やTA・SA育成プログラムの開発研究、アクティブラーニング型教育開発支援およびOCU指標を用いた学修支援に関する研究等を行っています。

②大学院共通教育関連:大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通教育科目の制度立ち上げや構築にこれまで関わってきました。現在は、大学院共通教育科目のキャリアデザイン系の講義・演習科目等の開発と提供を行っています。

③学士課程における横断型教育プログラム関連:「大学での学び」への円滑な移行のために行われる初年次教育（学士課程導入教育科目など）の全学的質保証に関わる仕組みづくりへの協力や、全学共通教育における初年次教育関連科目の提供を行っています。2015（平成27）年度より発足している副専攻プログラム（Community Regeneration副専攻, Global Communication副専攻）の質保証（評価のあり方研究など）にも協力しています。

（3）本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学では、FD（ファカルティ・ディベロップメント）を、本学の学生が真に学ぶ教育の高い質の維持と一層の向上のための、構成員全体（教員・職員・学生）の自律的で組織的な取組として捉えています。センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部等の教育改善・FDの取組への協力支援も行っています。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析を定期的に行うとともに、集まった教育実践事例を教員相互で活用し合えるWEBデータベースも開発し公開しています。

（4）その他、学内の教育研究・教育改善・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行っています。

①入学者追跡調査の実施および入試選抜方法や入学後の教育改善に関する研究、②全学と学位プログラムごとの3ポリシーの点検・改訂支援、③教育評価方針と計画の策定支援、④本学の教学IR等、教育の内部質保証システムの構築支援、⑤ポストドクター人材向け大学授業実習制度の開発・実施協力、⑥博士・修士人材向けキャリア形成支援の開発・推進など。

AP事業（2016年度～）の推進を支援しています!

AP事業とは…、文部科学省補助金事業「大学教育再生加速プログラム」のことで、高校や社会との円滑な接続のもと、入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、先進的な取組を実施する大学等を支援することを目的とした事業です。大阪市立大学では、テーマⅤ（卒業時における質保証の取組の強化）で「OCU指標とその活用スキームによる学修成果の質保証」の取組が採択されています。OCU指標の開発や学修支援推進室（通称:OCUラーニングセンター）の運営等を初めとして同事業にセンターも協力・支援を行っています。

大学教育研究センター紹介

RDHE Osaka City University Center for Research & Development of Higher Education

大阪市立大学 大学教育研究センター

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。
以下の運営体制（左図）のもと、３本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト（右図）に取り組んでいます。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制

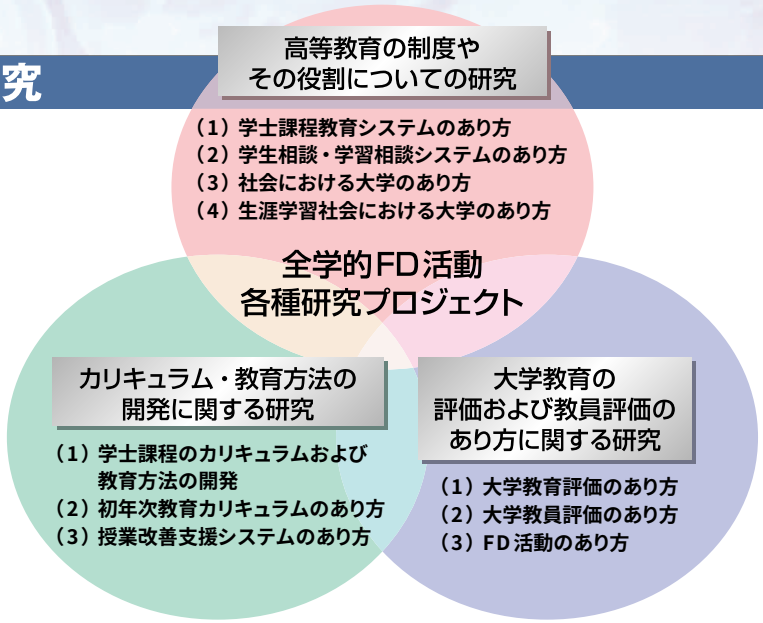
所長　教育・学生担当副学長

大学教育研究センター
副所長（専任研究員）・専任研究員・兼任研究員

教学・FD部門	評価部門	調査・研究部門
全学FD 横断型教育	学修評価 大学評価	調査研究 教学IR

大阪市立大学大学教育研究センター規程第３条（事業）

(1)大学教育に関する**研究、調査、企画、提案、及び提言**に関すること
(2)大学教育に係る**点検、評価及び改善**に関すること
(3)**教育方法の開発、教育・学修支援**及び**全学的FD推進の支援**並びに**各部局等へのFD支援**に関すること
(4)**その他**前条の目的を達するために必要な事項
（平成31年４月1日から施行。）



大学教育研究センタースタッフの紹介（平成31（2019）年3月現在）

■所長

橋本 文彦
副学長

■専任研究員

大久保 敦
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：高校大学の接続／科学教育／古植物学

飯吉 弘子
大学教育研究センター教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

西垣 順子
大学教育研究センター准教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

渡邊 席子
大学教育研究センター准教授
研究分野：教育支援システムの開発／キャリア教育／社会心理学

平　知宏
大学教育研究センター特任講師
研究分野：データに基づく教育改善／認知科学

■兼任研究員

石井 真一
経営学研究科教授

脇村 孝平
経済学研究科教授

杉本 好央
法学研究科教授

高梨 友宏
文学研究科教授

福島 祥行
文学研究科教授

柵山 徹也
理学研究科准教授

水野 寿朗
理学研究科講師

金　大貴
工学研究科教授

谷口 与史也
工学研究科教授

大西 克実
工学研究科准教授

広常 真治
医学研究科教授

玉上 麻美
看護学研究科教授

松木 洋人
生活科学研究科准教授

永村 一雄
生活科学研究科教授

五石 敬路
都市経営研究科准教授

■事務局

清水 浩司
学務企画課長

竹澤 直之
学務企画課係長

大谷 敏恵
学務企画課員

編集後記

本学の教育広報誌『大学教育だより』と全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を今年も合冊発行しました。

『大学教育だより』「VOICE」欄では、普段は互いにあまり交流のない、商学部と工学部建築学科の学生の皆さんが、互いのゼミ発表や作品発表を見学し合ったうえで座談会を行いました。イノベーションは異質なもの同士の間でしか生まれないとの説もあります。違っているようで同じで、同じようで違っている、数多くの学問や人がいる総合大学という場所を、最大限に活用して学び合ってほしいとの思いも込めて、この企画を10年以上毎年様々な組み合わせで行っています。私も毎回とても学びがあります。その他、部局の教育紹介として今年は、経済／法／理学部・研究科が特色ある教育の取組の紹介を、市大ニュースでは、副専攻制度やOCUラーニングセンター（学修支援推進室）での学修支援の取組の紹介も行っています。

『アン ロゾ』は、英語教育開発センターの井狩先生と、教育改革担当特命副学長で生活科学研究科の永村先生が、大学での学びのあり方について語って下さっています。

新入生をはじめ在学生の皆さん、先生方、学外の方々が、本学の教育や学修支援の多様な取り組みについて、知る機会や、学生の皆さんの大学での学びの道しるべにしていただければ幸いです。（飯吉）

編集委員：飯吉 弘子・石井 真一・金 大貴

大学教育研究センター紹介